

ルソーにおける想像力の問題

宮 谷 徳 三

—Toutes mes idées sont en images—J.-J. Rousseau—

ルソーは矛盾の人だといわれる。その複雑なことは誰しも否定しえないであろう。ルソーの著作を意味、分析し、そこから一つの思想体系、一つの文学、美学、人間を導き出すとすれば、すぐさま困難にゆき当らざるをえないだろう。ルソーのデキストは、少くともそうした分析に適するようにはできていない。もとよりルソーの特性は、そうした論理的思考にあるのではなく、十八世紀フランスにおける *sentiment naturel*, *sensibilité* といった諸傾向——ロマンチックな——を最も鋭利に消化し、これを自己の中に再現し、また表現し得た稀有の天才とみるべきであろう。いかにルソーの反對者といえども、その芸術的天分は否定しえない所である。

しかし、そこから一つの誤解が生じる。ルソーを *artiste* として評価しながら、*penseur* としては認めないという傾向である。「告白」「新エロイズ」などの文学作品を賞讃しながら「社会契約論」をルソーの一破局とみなすのである (Charley, Faguet, Ducros, Mornet など)。更に、デギューに至っては「ジャン・ジャ

ック・ルソーはジャコバン的専制主義とケーザルの独裁主義の父であり、而も一層精密に觀察するなら、カントやヘーゲルの絶対主義理論の鼓吹者でもある (1) と断言して、社会契約論を一七八九年の人権宣言の対蹠に位置づける。このような解釈は現在もかなり有力であり、たとえば B・ラッセルはルソーをヒトラーの元祖にまつり上げるなど、(2) 何らかの意味でルソー・全体主義者——*democratic totalitarian* ともいうのだが——とみることが、いわば一種の流行にさえなっている。

このような見方は、いずれもその一面は認め得るとしても、ルソーが現実には及ぼした影響——歴史的事実——からみるとやはり誤りだといわざるを得ないだろう。ルソーが最も直接的に、情熱的に受け入れられたのは、そうした全体主義的傾向においてではなく、一七八九年の革命の担い手であり、ドイツでは、何よりもレッツィングであり、*Sturm und Drang* の運動であり、その他のデモクラチックな近代的思想、芸術の運動においてであった。それではルソーは誤って解され、受け容れられていたのであるうか。(ルソーは芸術家か、思想家か、個人主義者か、集団主義者か、全体主義者か、とい

う問いは、デカルトを唯物論者が観念論者かと問うのと同様、余り有益ではないように思われる。少くともそのような区別はルソーに意識されていなかったし、またされる必然性もなかった。それは十九世紀以後、市民社会の矛盾が露呈されてからの問題だからだ。

従ってルソーをより正しく解釈するためには、分析方法を変える必要がある。テキストの矛盾から、それを全体主義に帰してしまったり、ロマンチックな傾向だけを拾い集めるのではなく、著作全体としての理解に立つて、そこでルソーが何を主張し、何を試みようとしたか、という思想の意味を受けとり、そこに何らかの積極性をみい出していこうという点から問題を提起したのはE・カッシーラーであった。彼はルソー自身の知的発展、想像力の進化を跡づけながら、ルソー独自の問題解決方法を説明し、著作相互の表現上の矛盾よりも、その根本的同一性、相互関連、「精神的オルガニズム」としての理解、ルソーのもたらした様々の歴史の意味を強調する。(3) またこのようなカント主義的ルソー観に反発、批判しながらも、ルソーにおける *raison* の概念に注目し、ある相対的な *rationalisme* を跡づけようとするドラテの業跡や、(4) 存在論的観点から、「社会契約論」に統一点をおく広義の体系をルソーに認めようとするP・ブルジュランの綿密な研究は、(5) こうしたカッシーラー以後の新しいすぐれた解釈の方向を示している、と考えられる。

そこで、一つの試みとして、想像力 (*l'image et l'imagination*) という観点(あるいは三木清のいう構想力の論理⁽⁶⁾)から作家の人と作品にせまることが可能であり、またルソーの特殊性を考える上で、特に有効であると思われる。ルソーのもつ論理は、右に述べたように必ずしも理性的、形式的論理ではないからである。

しかしながら、想像力の問題を扱うことは容易なことではない。イマージュという概念それ自体、余り明白ではないからである。想像力は、一般に、イマージュを生み出す能力と定義される。イマージュとは視覚、あるいはかつて経験された感覚の連続としての再生産物である。また知覚による類似の現象からこの言葉は拡大され、感覚的再現 (*présentation ou représentation sensible*) をも意味し、ここで想像力は絵画的イマージュ、あるいは現実を再現するのではないが自然現象を模倣する連続的イマージュ(夢想、芸術作品などの)を結合する能力となり、創造的想像力 (*l'imagination créatrice*) と呼ばれる。(7)

パスカルが想像力を「誤診の主」(*mal-jésse derreurs*) 「理性の敵」として排斥したことは有名であるが、デカルトからアランまで、フランスの理論家たちが想像力に対してとった態度は概ね否定的であり、これが真に思考の働き、創造的自発性として記述されたのはJ||P・サルトルによってであるといわれる。(8) だがわれわれはルソーのテキストに「すべて私の思想はイマージュとしてある」という一句にゆき当るし、想像力に関する素朴ではあるが大胆な理論と実践をそこにみることが出来る。まずこの点に注目し、若干の問題を検討してみたいと思う。

- (1) L. Duguit: *The Law and the State* (訳「法と国家」岩波文庫 p.44)
- (2) B. Russell: *A History of Western Philosophy*. G. Allen & Unwin, p. 711
- (3) E. Cassirer: *Das Problem Jean-Jacques Rousseau*. 1932

(The Question of Jean-Jacques Rousseau. Columbia univ. Press)

- (4) R. Derath; Le Rationalisme de J.-J. Rousseau. P. U. F.
- (5) P. Burgelin; La Philosophie de l'existence de J.-J. Rousseau. P. U. F.
- (6) 三木清「構想力の論理」(岩波版、著作集第八巻)序文参照
cf. Lalando; Vocabulaire de Philosophie, art. Image et Imagination.
- (8) Bernis; L'Imagination. col. Que-sais-je?
- (9) J.-J. Rousseau; Les Confessions. éd. classique Garnier, tom. II, p. 347

「ジャン・ジャックは私にとって自然の画家 (le peintre de la nature) であり、人間心情の歴史家 (l'historien du coeur humain) であった。」⁽¹⁾晩年のルソーは自らを顧てこう語っている。ルソーは絵筆をとって自然を描く画家ではなかったし、少くともゾオルテール程も歴史家ではなかった。画家、歴史家とは、要するにルソーの個有な認識、表現の論理を説明するものなのだ。このことはすでに初期の論文に現われている。「学芸論」で現実社会の腐敗混乱を語った後、次のようにいっている。

《Opposons à ces tableaux celui des moeurs du petit nombre de peuple. Mais franchissons la distance des lieux et des temps ou plutôt, écartons des peintures offensives qui blesseraient notre délicatesse》⁽²⁾
この絵 (tableaux, peintures) とは「腐敗、墮落、裏切、殺人な

どの悪徳に満ちた現実社会のイマージュであり、ルソーはこの画面として現実を認識し、これに少数民族国家という理想像を対置するのである。ルソーの現実認識、批判は常にこのようなタブローの論理で始まり、進められている。「人間不平等起源論」に加筆されたジュネーヴ共和国への献辞には、「自著を「人間社会の画面」(ce tableau de la société humaine)と呼んでいる。⁽³⁾従って不平等論の中心テーマである自然状態というのは、社会制度が成立する以前にかつてあったという歴史的概念ではない。ルソー自身ことわっているように「もはや存在せず、恐らくは存在したこともなく、これからも存在しやうにない状態」であり、一つの理想像、いいかえるなら、画家ルソーの描いたタブローにおける一状態なのだ。このような論理はルソーに一貫している。

このタブローは理想的世界に限らない。ルソーは自らを描く (se peindre) ことを試みる。ありのままの自分を暴露出して世に問うとした「告白」の最初の意図も、実は一つのタブローであった。少くともそうならざるを得なかったのである。想像力や記憶の混乱によつて筆が止まった時、そのような自分を省てルソーは自問している。《Au lieu de cela... quel tableau vais-je faire?》《Je n'ai pas promis d'offrir au public un grand personnage; j'ai promis de me peindre tel que je suis》《Quel tableau diffèrent j'aurai bientôt à développer.》⁽⁴⁾

単に自己を語るだけの自画像なら、すでにモンテーニュにあり、また十七世紀以来 portrait-mémoires のジャンルがある。だが portrait と tableau は同じではない。パスカルは雄弁を思想の絵と考えてこの二つを分け、想像力による装飾の多い tableau を斥

け、その伴わぬ *portrait* を選んでいる。ルソーは逆に、「*portrait* はいかに実物と異つていても似ていさえすればよい。だが *tableau d'imagination* はすべての形相が人間に共通な特徴をもたねばならない。そうでなければ *tableau* に価値はない」といつて *tableau* をとつてゐる。このような區別になつて、ルソーがあえて *tableau* とつら名を与へつてゐることからも、「告白」が単なる自叙伝でないことは明白である。

- (1) J.-J. Rousseau; Rousseau juge de Jean-Jacques, Dialogues. Oeuvres complètes de J.-J. Rousseau. H. Peret, tom. 18 p. 123
- (2) J.-J. Rousseau; Discours sur les sciences et les arts. Garnier, p. 8—11
- (3) J.-J. Rousseau; Discours sur l'origine de l'inégalité parmi les hommes. Garnier, p. 26
- (4) Conf. I. 60, 236, II. 73
- (5) Pensées de Pascal fr. 26
- (6) J.-J. Rousseau; La Nouvelle Héloïse, Seconde Préface. éd. Les Grands Ecrivains de la France, Hachette, tom V. p. 341

このように自分の著作を *tableau d'imagination* と呼ぶにはルソーなりの根拠がある。「道徳的手紙」に素朴な想像力の理論をみることができる。彼はいつてゐる。「われわれは他人の魂を知ることができない。それは隠されているから。また自分の魂を知ることが

できない。われわれは知的な鏡をもたないから。われわれはあらゆる点で盲目であるが、それが視覚のせいであることを想像してもみない、生れながらの盲目である。(1) ルソーにとつて人間は、他の動物と同様、自然から感官を与えられている「精巧な機械」であり、外的事象はすべてこの感官によつて知覚される。だから感官は「すべての認識の道具」であり、われわれのイデーはすべてそこから来るか、少くともそれによつて惹き起される。つまり人間にとつて現実的なものはすべて感覚を通して与えられるということが、すでにルソーには強く意識されてゐるのである。

しかしデカルトがいうように、感官はしばしばわれわれを欺く。だがルソーにとつてそのこと自体は大したことはない。なぜなら一感官の誤謬は他の感官によつて矯正され得るから。五感の中でも視覚と触覚は「真理の探究にもっとも役立つ感官」である。だが「目は遠くの事物に固定されると、それだけ視覚的幻想に惑わされるし、手は常に部分にしか触れることができず、全体を握むことはできない」つまり視覚、触覚はより全的に対象を把握しやすく、またもつとも誤り易い能力なのだ。そして幾何学でさえも、実はこの二つの感官に基づいて構成されているに過ぎないのだとルソーはいう。「この二つの感官は、恐らくわれわれに欠けている他のものによつて矯正される必要がある。だから証明されたこともやはり疑わしいのであり、われわれはユークリッドの諸原理が誤謬の織物ではないかということも分らないのである。」ここに幾何学的精神は無力なものとみなされる。そればかりでなく、われわれの精神はたえず想像的なものに惹きつけられてゐる事実をルソーは認めようとするのである。「われわれの魂は諸関係の中で活発となり、じつと

しているよりは手のとどく範圍で空想を働かせたがるものである。」
事実、現存の博識はイデーよりもイマージュによっているものが多い。「もはや誰も研究しないし、観察もしない。ただ夢想している。そしていつか悪夜の夢を仰々しく哲学だといっておしつけるのである。」ルソー自身この夢想をしていることを否定しない。だが「私は夢を夢として表現し、目覚めている人々に何か有益なことを期しているのだ⁽²⁾」という。つまりルソーは、われわれの避けることのできないイマージュをイマージュとしてその功罪を認めた上で、これをより積極的に展開しようとするのだ。更に彼はいつている。「幾多の秩序や、自然のなす業の永遠の讃美者、人間の行為をたえず目撃しているものの、あの無限の精神に満ちた拡大な宇宙の側面を、何故われわれは想像しようとしぬのか⁽³⁾」

このライブニッツの立場は「サヴォア副司祭の信仰告白」において一層明瞭な形をとっている。「われわれは至る所で知ることのできない神秘にとり囲まれており、それは感覚的領域の外にある。われわれはそれを知るために知性をもっている⁽⁴⁾と信じているが、実際には想像力しかない。各人はこの想像界 (le monde imaginaire) を通して善と信じる道をたどるのであるが、誰もそれが目的に達するかどうかは知らないのである。⁽⁵⁾」たとえ人間の認識が進んだとしても、やはり世界の神秘的側面は同じように残されるであらう。だから想像力は常に形而上学的知性の代行者として意味をもち続けるのである。このことはその内容が無意味だということにはならない。信仰告白は逆に、啓示がこの媒介的能力としての想像力を支配できることを示している。人間の認識が完全でなく、'imagine'として残されるということは、同時にまた感受できないある現実を認識

することでもあるのだ。更にまた、イデーが「諸関係によって決定された対象の概念」であり、常に他を前提するのに対し、イマージュは絶対であり、無限であり、それを現わす精神の中で単独に存在することができるとする。『人間は想像する時、見るだけであるが、思索する時は比較する⁽⁵⁾』だから想像力はあるもつとも深い自由と創造を保証するものなのだ。

- (1) Les lettres morales (ou les lettres à Sophie), Correspondance génée, de J.-J. Rousseau. A. Colin, tom. II p.354
- (2) J.-J. Rousseau; Emile. éd Lutetia, tom. I p.164 note
- (3) Let. morales, p.357
- (4) Emile. I. .20
- (5) Emile. I. .156

だからといって、ルソーは理性、理性的なものを全く放棄してしまつたのでは決してない。「エミール」では「すべての能力の中で、理性はいわば他のすべての能力の複合にすぎず、もつとも困難に、もつとも遅く発達するものである⁽¹⁾」と云つて、子供における最初の理性を感覚的理性 (la raison sensitive) と呼び後にこれを基礎として発達する知性理性 (la raison intellectuelle) と區別している。つまりルソーにとって理性とはア・プリオリにあるものではなく、本質的に発達し得るもの、また発達させねばならないものなのだ。だから理性には段階があり、それによってより真理に近づくこともでき、またそれに欺かれることにもなるのだ。こうした

二重の意味で、ルソーには常に理性が中心に考えられており、ドラテのいう *rationalisme* が根底にあるのである。そしてこの場合理性の役割は真理を発見するというよりは、真理を確信する (*confiner*) ことにある。

だからルソーの思索は、デカルトのそれとは全く異なる。一七四九年、ルソーがディジョンのアカデミーの懸賞論文の題をみた時、「これを読んだ瞬間、私にはある別世界がみえ、私は全く別人となった。……私の感情は私の思想の調子に恐るべき速さで興奮し、私の全情念は真理と自由と徳へ熱狂によっておしひしがれてしまった⁽²⁾」といい、また一七五四年、第二論文「不平等起源論」を書くために旅行した際、森を散歩し、そこに「原始時代のイメージ」 (*l'image des premiers temps*) をさがし求め、みい出したといっている。⁽³⁾ここで彼は人間社会の偏見、誤謬、不幸、罪戾をこのイメージと共に考え、思索した末この論文が出来上るのである。だから思索する (*contempler*) ということは、現実存在しないある世界、像をみることに、つまり想像することなのだ。ルソーにおいて思索力 (*faculté contemplative*) を意味する語は理性ではなく想像力 (*imagination*) に他ならない。

このような理論から当然デカルト批判が生じる。「デカルトは一挙に偏見の根を絶ち切ろうとしてすべての懐疑に投げこみ、すべてを理性の検討にゆだねることから始め、「われ思う故にわれあり」という唯一異論のない原理から出発し、非常な注意深さで進み、真理に到達したと信じているのだが、虚偽 (*des mensonges*) しか発見しなかった⁽⁴⁾」つまり延長と思惟という二つの実体が、同じ一つの実体の中で結合し合わないということは絶対に不可能であり、

また事実ニュートンやロックの自然学によって、すでにこの二元論は反証されているというのである。ルソーは当時の科学 (自然学 *la science de la nature*) の業績とその発展の可能性に相当の信頼をいだいていたことが伺われる。物理学と形而上学の未分離な、デカルト的な体系や方法が、科学の発展によってうち破られることを認め、ルソーは《Adieu toute la philosophie du sage et méthodique Descartes》⁽⁵⁾と叫ぶのである。しかしルソーは自然学者ではない。彼の研究対象は物理学的な自然ではなく、しばしばいっているように人間についてであり、人間の自然についてである。だからそこに働く論理は自然学におけるような理性的、抽象的なものではなく、視覚的、具体的なもの、即ち想像力 (構想力) の論理なのだ。ルソーのいう人間学 (*la science de l'homme*) とは、デカルトを越えた自然学の成果を前提とし、またそれと区別された、このような人間研究の立場なのだ。想像力はだから理性的なものを前提にする。それによって想像力は一層豊かに進化発展され、また教育の対象にもなるのだ。ルソーが子供に宗教教育、偶像崇拜を禁じたのは、理性が発達しない段階で神に対するイマジニが固定されてしまうことを恐れたからであり、またエミールに唯一の読書として「ロビンソン・クルーソー」を与えたのは「初期の想像力の訓練のため」だったのである。

- (1) *Emile* I. 121
- (2) *Conf. I.* 171
- (3) *Conf. II.* 221-2
- (4) *Lett. morales.* 356

(5) Ibid. 357.

想像力はとりわけ情念と結びついている。「あらゆる情念の源は感受性であり、想像力はその傾向を決める」「情念に火を点けるものは想像力である」(1)「情熱的行動は、よかれあしかれ常に想像力を前提にし、それは人間を鼓舞する力 (faculté animatrice) でもある。だから想像力の敵は理性ではなく、あらゆる情念を枯らしてしまう習慣 (habitude) なのだ。ここにまた人間の幸福、道徳の問題が生じる。ルソーはこれを「エミール」で人間の成長の中で考えようとする。即ち欲望が芽ばえて来て行動化すると、想像力は他の何よりも活発となり、可能性の範囲は拡張され、想像界は無限なものとなる。ここに *le réel* と *l'imaginaire* の矛盾が生じ、そこからわれわれの不幸が始まるというのである。力、健康、自覚を除けば「この世のすべての幸福は偏見にある」し、身体の苦悩や良心の苛責を除けば「すべての不幸は想像的なものである」(2)「植民地に投資して幸福そのものの男が、彼の破産を知らせる一枚の紙片によって絶望のどん底につき落される。ということとは、その幸福が実は *imaginaire* に過ぎなかったことを意味している。つまりルソーにとって、幸福も不幸も、また人間の存在そのものまでもが想像的なものと自覚されているのである。この所を原文で引用すると――

《 la santé, la gaieté, le bien-être, le contentement d'esprit ne sont que des visions. Nous n'existons plus où nous sommes, nous n'existons qu'où nous ne sommes pas 》(3)「つまり、われわれが幸福だと思っていることは、実は単なる幻想かも知れないのであり、現実に関係がおかれている受動的存在としての *existence* と、主体的に自覚される能動的存在 *être* とは分離され、

われわれは自らの意志に反し、何ものかに譲り渡され、疎外されている。これがわれわれの *misère* の状況なのだ。そこから救われるためにわれわれは *j'existe où je suis* なる状態に復帰しなければならぬ。それにはどうすればよいのか。ルソーの解答はこうである。《 O homme ! resserre ton existence au dedans de toi, et tu ne seras plus misérable... 》つまり自分の存在、活動範囲を自らの制御可能な範囲に限定し、そこに自らの自由を確立せよというのである。これは同時に想像力の制限を含んでいる。

だが、それにも抱らず現実には越えることのできない様々の不幸がある。そうした場合はいかにして幸福になることができるか。この答もまた想像力なのだ。恋人と別離させられたジュリは、その愛の生活を想い出していつている。《 O douces illusions ! ô chimères, dernières ressources des malheureux ! ah, s'il se peut, tenez nous le lieu de réalité ! Vous êtes quelque chose encore à ceux pour qui le bonheur n'est plus rien 》シエリにとって、想像力は現実成就できない幸福の代行者であり、この世で満たされ得ない人間が天から与えられた慰めの力 (*une force consolante*) (5) なのだ。

要するにルソーの立場は、パスカルをはじめ十七世紀以来考えられて来たように、想像力を欺く性能として排斥するのではなく、それに積極的の意味を与えようとするのである。イマージュは単に子供っぽい空想や、情念が生み出す不合理な幻惑を意味するのではない。そこには常に理性的なものと、感性的なものとの統一が、不完全ではあるが考えられている。この意味で、カントにおける構想力 (*Einbildungskraft*) の萌芽をルソーをみることはできないであらう。

うか。

- (1) *Emile* I. p. 365, 209
- (2) *Ibid.* 104
- (3) *Ibid.* 109
- (4) *N. H.* II 399
- (5) *Ibid.* N. 203

このような想像力の理論に——ルソーの場合常にそうなのだが——とりわけルソー自身の経験に基づいている。彼はいつて「私の悪い頭は事物に従おうとはしない。美化するのではなく、創造しようとする。実際の事物 (*les objets réels*) はせいぜいありのままに描かれているだけで、私の頭は想像的な事物 (*les objets imaginaires*) を用意することしかしない。もし私が春を描こうとするなら、私は冬にしなければならず、もし私が美しい風景を描こうとするなら壁の中に居なければならぬ。しばしばいつて来たことだが、もし私がバスチーユにはうり込まれていたら、私はそこで自由のタブローを作ることができるだろう。(1) ルソーの想像力は現実の対象から独立した、本質的に創造的なものである。この立場は、パスカルが「模倣すべき自然なモデル」(2) を考えたように、模倣を中心に考えた古典主義的立場と全く逆である。だからルソーに、普通の意味でのリアリズム、ポジチビズムをみることはできない。ルソーの著作は先に述べたようにタブローであり、彼の豊かな想像力が生み出したイマージュの構成物なのだ。

しかしこのような豊かな想像力もルソーの生涯を通してかなりの

変化、進化の跡がみられる。大きく分けると幼少の頃、父親と二人で小説を読みあかした頃から一七四六年、三十才近くなってパリに到着したまでの時期、それから主要著作を書き、もっとも活動的であった十年余、周囲の迫害からサン・ピエール島に逃れ、「告白」の一部を書くまでの時期、そしてそれ以後孤独に生涯をとじるまでの時期である。(3) 第一期はルソー自身未だ知的な自我に目覚めていず、そのイマージュには何の合理性もなく、むしろ子供っぽい、甘味でオプチミストな夢が多い。パリに来てデイドロやコンヂヤックなどと交わり、第一論文を書くに及んでその想像力は理性的なものを含み、非常に豊富さと積極性をもつて来る。第三期は周囲の迫害にもまして、自分自身の想像力の衰えをなげきつつ書き残した「孤独な散歩者の夢想」に象徴される夢想の時期である。この間ルソーが書き残したものの中からイマージュの変遷の跡をみることもできるが、例を一つあげると、先に引用したバスチーユにとらえられていると、よりよく自由を考えることができる、という意味のことをいうのに「告白」と「夢想」で少し異った表現がある。

○ j'ai dit cent fois que si j'étais mis à la Bastille, j'y
faisais le tableau de la liberté. (Conf.)

○ j'ai souvent pensé qu'à la Bastille, et même dans un
cachot où nul objet n'eût frappé ma vue, j'aurais encore
pu rêver agréablement (Réveries)

ルソーにとつて *faire le tableau* とは要するに想像するという意味で、*rêver* とほぼ類似の表現であるが、この二つのニュアンスは同じではない。前者は社会像、人間像を描き出そうという積極性があるが、後者は無の中で夢想するという、きわめてネガティブな

ものである。この表現上の相違は、晩年のルソーの想像力が、いわば後向きになっていたことを示している。

ともあれ「告白」の一部には、第一期、二期の想像力に関する様々の逸話や豊かなイマージュがみられるが、今それに一つ一つふれることはできない。要するにルソー自身非常に豊かな想像力の持主であり、実に豊かな想像経験をもっていたということ、(フアゲの計算によると二十八年間夢想していたことになる)⁽⁵⁾を記するに止めたいと思う。そして「告白」は、「学芸論」から「エミール」に至る社会性をもった人間研究の著作を書き終えたルソーの想像力が、その青春の追憶 (image-souvenir) において再び自らの役割をみい出した著作であるということ、つまりそれは単なる自画像ではなく、あらゆる人間に共通な諸特徴を描き出した *l'homme* であったということをつけ加えておきたいと思う。「告白」は「エミール」「新エロイズ」の基礎であると同時に続編でもあるわけだ。

- (1) Conf. I. p. 231
- (2) *Peusées de Pascal* fr. 33
- (3) これは桑原先生の「ルソー研究」における ① 幼少年期 ② 依存の時期 ③ 戦斗の時期 ④ 隠退の時期という四区分の最初の ① ② を一つにしたものと一致する。桑原武夫編「ルソー研究」p. 5 参照
- (4) J.-J. Rousseau, *Rêveries du promeneur solitaire*. Garnier, p. 52
- (5) E. Faguet, *Rousseau Artiste* 49

- (6) 「告白」に積極性を認める解釈はカッシーラーにもみられ
c. cf. E. Cassirer, *The Questions of Jean-Jacques*
Rousseau. 50~52

ルソーの想像的なものに対する関心は、言語の問題にもみることができ。言語はルソーに限らず、すでに十八世紀の哲学者たち、特に感覚派心理学者たちに共通の重要な問題であった。中でもコンデアックなどに導かれ、ルソーは言語を特にその起源において考えようとする。「不平等論」「エミール」に断片的に扱いはながら、それに満足できず、独自の「言語起源論」を書いている。これによると、原始人が他の人間と知り合うと、思想感情を伝達したい欲求からその手段をみつけ出す。が、それも感官の領域を出ることはできず、ここに感覚的符号がつくられる。これは身振言語と音声言語の二つで、前者は必要、後者は情念に由来している。このようにしてできた最初の言語の例として、古代東方の言語はすこしも組織的、推論的ではなく、いきいきとした形象的なもので、幾何学者の言葉より詩人の言葉であった。これは「人は理性的に考える (raisonner) よりも感じる (sentir) ことから始める」からである。だから最初の言語は単純でも、組織的でもなく、歌謡的で情熱的であったが、完成されていくにつれ、そのメロディは新しい規則に縛られ、いつの間にかそのエネルギーを失ってしまった。「哲学の研究や推論の進歩は、文法を完成することによって、国語からいきいきとした情熱的な調子をとり去ってしまった。ギリシャが詭弁家や哲学者に満ちて以来、有名な詩人も音楽家もみられないし、人を屈服させる術を磨くことによって、人を感動させる術をなくしてしまった⁽¹⁾」とい

うのである。

これは最初「メロディの原理に関する試論」という題で考えられていたもので、主題はむしろ音声の問題にあるのだが、言語の成立における想像力の役割が、やはり中心に考えられている。原初的な言語が感官に依存し、感官はたえずイマーシユを生み出すのだから、ことは当然それに結びつく。「情念によつて錯誤したイマーシユがまず現れ、それに応えることが最初の発明であつた。だからそのことはば比喩的になる。この時、明快な精神が最初の誤りに気づいても、それを生み出した同じ情念においてしか表現できない。」⁽²⁾だから、ことはその発生において、何らかのイマーシユの反射であり、こうして生れた語は形象語であり、本義語に先だつた。たとえば原始人が森の中で自分より大きく、強そうにみえる男に出あつたとする。彼は驚きと恐怖から「巨人」という名を与えるが、自分や彼らに共通な「人間」という名辞を発明するのはずっと多くの経験を経た後だつたというのである。身振り語や形象語は、それ自身意味やイデーを表現するものではなく、何らかの形象を通して、つまり相互の想像力による伝達の方法である。この想像力による伝達方法がより力強く、またより変化と表現に富んだものであることは、現代語においてもみられることで、「もつとも雄弁な談話」とは、もつとも多くのイマーシユを挿入した談話であり、音はそれが色彩の効果をあげる時しか力をもたない⁽³⁾」ことから証明できるという。

要するにルソーは、言語をまず感覚の問題として考え、人間の直接経験に帰する。言語活動は常に人間の内部に考えられるのである。だから孤立した語そのものは、意味をなさない。コンディヤッ

クにとつて、人間精神発達の一要因は規約的記号、即ち語の発明にあり、これによつてのみ人間は自らの思想、行動の主たることができる、それなしには、人間は完全に外的事象に屈することになる。⁽⁴⁾このような心理学的説明はルソーにはない。彼にとつて語は相対的な信号にすぎない。最初のことばには同じものを表わすのに、その異つた角度から多くの同意語があつたといつて、アラビヤ語にらくだを意味する語が千以上あつたことをあげる。つまり語はその角度に相対的なのだ。更にまた、彼自身の著述経験は「同じ語にたえず同じ意味を与えて使うことは不可能である」⁽⁵⁾ことを教えている。つまり一つの語の意味さえも固定し、決定されているものではなく、その使われる場に相対的なのだ。語はプラトンの唯名論者のいうようにそれ自身の意味を与えられて独立に存在するものではないのである。だからことばの遊戲にすぎないような哲学ほど馬鹿げた、また危険なものはない。「形而上学の隠語では、唯一つの真理も見されたことはない」⁽⁶⁾のである。ルソーの哲学者批判は、主としてこの言語の問題から来ているのである。

しかし、これはルソーがすべて本義語や、哲学用語を否定したのでもなく、また「自由」とか「魂」「実体」という觀念をもち得ないということでもない。何のイデーも、何のイマーシユも呼び起こさないような語の使用は無意味である、といつてゐるに過ぎない。彼は別に純粋な、抽象的なイデーとしての一般觀念を考えているのだ。それは「純粋に知的なもので、少しでも想像力が混じると、その觀念は特殊なものになってしまう」ようなもので、人がもち得る個々のイマーシユとは厳密に区別された、純粋なイデーなのだ。たとえば定義によつてのみ知られる三角形の如き。だから一般概念と

は語そのものでも、イマジューでもなく、それ自身あるもの、想像力の全く介しない純粹悟性に属するものなのだ。つまりルソーにはこのような純粹なイデーとイマジネールなものが二元的に考えられており、先に述べた理性的なものと情緒的なもの、自然学と人間学の対立に照応する。原始人や、論理的には自然人である子供たちに、自然のどこともそのモデルをみつけれない「実体」というような概念が理解できる筈がない。彼らはイマジューによつてものを考え、判断する。ルソーはこのイマジューによる思考の積極的意味を主張しているのであり、彼が情念語、原始言語に組するもののためである。

- (1) J.-J. Rousseau: Essai sur l'origine des langues. Oeuvres comp. de J.-J. Rousseau, éd. Arnaud-Aubrée, tom. 14. p. 195
- (2) Ibid. 145
- (3) Ibid. 140
- (4) cf. Condillac: Principes généraux de Grammaire pour toutes les langues.
- (5) Emile I. p. 157
- (6) Emile II. p. 31
- (7) Inég. p. 53

このような言語観から、当然ルソーの文体の特徴が導かれる。「新エロイズ」の序文に、彼は次のようにいっている。「この書簡集を読もうと決心した人は、ことばの誤りや、大げさで平板な文

体、未熟な用語による陳腐な思想に我慢するだけの覚悟がいる。これを書いた人はフランス人でも、才人でも、アカデミー会員でも、哲学者でもなく、田舎者であり、孤独者であり、殆んど子供ともいえる青年であり、そのロマネスクな想像力で、頭脳の混乱を哲学と考えている者が書いたものであるということを、まずことわっておかねばならない。」⁽¹⁾これは単に文体の放置に対する言訳というよりは、むしろ新しい文学宣言とみるべきである。「新エロイズ」以前、書くということは、たとえ魂の動きや混乱を表現する場合でも、常に秩序と均衡が要求され、内部から直接に表現するのではなく、写すことであつた。⁽²⁾そこで想像力の働きも、創造ではなく、現実の誇張、図解、性格化に向けられ、パスカル的モデルをよりよく認識するため、常に現実から出発し、対象に何らかの特徴づけを行うことであつた。だから古典主義的言語観、文体の制約から離れて、「ロマネスクな想像力」を中心にするということは、文体上の革命に等しい。ルソーの想像力は、古典主義作家のそれと全く逆に、本質的に創造的なものである。彼には常に現実の対象とイマジューが分離して存在し、イマジューによつて書くとする。現実的なものから出発せず、常に無から出発するのである。だから彼にはイマジュー、フィギュールが第一義的で、語そのものは第二義的であり、常に新しいイマジューがさがし求められる、例えば次のような一句は、当時は実に新鮮なものであつた。《Les doux rayons de la lune, le frémissement argente de l'eau...》⁽³⁾ルソーは自らイマジューを造り出し、読者の想像力に訴えようとする。このためイタフォールが多く使われるのはいうまでもない。これは先に述べたルソーの言語観から当然肯ける所である。(ルソーの文体の特

徴は他にいくつ上げることができるが、ここではふれないことにする。）

- (1) N. H. II. 2—3
- (2) cf. D. Mornet; L'introduction à la Nouvelle Héloïse.
N. H. I 301
- (3) N. H. II

最後に、ルソーの想像力が生み出した広義のイマージュ、つまりタブローについて簡単にふれておこう、ルソーの著作を読んだ人はそこに二つの異った理想の人間像、自然人と社会人（市民）をみるであろう。これは自然状態と市民社会（都市）に照応する。自然人は純粹に個人的、絶対的完全体で、自分自身と同類者としが関係をもたない。だが市民は常に集団的で、全体の中の一部、分数の分子的存在である。「政治経済論」では熱烈な愛國的市民の教育が論じられながら、「エミール」では、「もはや祖国がない以上、市民はありえない。この二つの語、祖国と市民は現代語から抹殺されねばならない(1)」と断言される。この両者は互いに融合することのできない本質的に異った存在で、普通ルソーの二元論と説明されている。(2) ルソーには常に「人間か市民か」(un homme ou un citoyen)という問いが中心にあり、「不平等起源論」「エミール」では人間が、「社会契約論」「政治経済論」「ポーランド統治論」では市民が各々肯定されている。これは全く次元を異にした二つの人物なのだ。

自然状態とは、先に述べた通り森の中の思索から生れた「原始時

代のイマージュ」であり、すべての事実を遠ざけてなされた「条件的推論」によっており、今日いう歴史的客観性も実証性もない。だがルソー自身いつているように、「この原初的條件の仮定を長く詳しく述べたのは、以前の誤謬と破壊すべき根強い偏見が存在する限り、これを根底からうち壊し、不平等が、たとえ自然的なものであっても、作家たちが主張するものといかにかき離れたものであるかということを、真の自然状態のタブローの中で示さねばならないと思うたからである。」(3) 従ってこれは単なる想像力の産物ではなく、あくまで現実批判から出発したものであり、その意味である現実性を含んでいるのである。

「エミール」では、自然人が現実の人間の中に求められる。この教育を受ける生徒は「想像的生徒」「抽象的人間」として示される。彼は普通にみかけられる現存の人物ではなく、現実的情况の外に置かれている。彼がいかに優れた教育を受けようとも、そのような人間は現実には存在し得ないのである。つまり彼もまたタブローに描かれた一人物なのだ。市民社会に関しても同じことがいえる。二十才の時、ルソーは放浪しつつジュネーヴを通りかかり、「崇高な自由のイマージュ(4)」をそこに見、それをパリに持ち帰ったといっている。自由、平等、風俗といった概念は、イデーとしてよりもまずイマージュとしてルソーには考えられているのである。これが後に「不平等論」の献辞に示された「社会契約論」の基礎になっているところになっていること、また「社会契約論」の基礎になっていることは明らかである。だから都市とか市民という概念も、ルソーにあっては、現存する社会体制の中に認められる現実的概念ではなく、ある抽象された想像的な概念である。これをルソーは「社会

契約論」の註で説明している。「この語の眞の意味は現代人の間では殆んど消えうせている。大概の人は町を都市と、町人を市民ととり違えている。彼らは家屋が町を、市民が都市を形成するものであることを知らないのだ。」⁽⁵⁾「このことは都市や市民が、やはりタブローにおいてしか存在し得ないことを示している。

「不平等起源論」が原始状態の様々なイマージュによって記述されているように、「社会契約論」も数々のイマージュに満たされている。ファゲが指摘しているように、⁽⁶⁾ルソーの著作はイデオロジックであればある程、それだけ大胆なイマージュによって考察されているのである。「人間は自由なものとして生れる。が到る所で鉄鎖に、連がれている」という書き出しには、すでに二つの世界像（自由と奴隸との）が現わされている。そして「いかにしてこの変化が生じたか」つまり、いかにして一つのイマージュから他へ移ったか、ここに問題の研究が始まるのである。

更にまた、ルソーの社会学上の重要な概念は殆んど比喩を使って説明される。しかもそれは常に人間生活に関係の深いイマージュである。「政治経済論」では政治体制が生きた人間の体組織に比喩化され、主権は頭、法と習慣は頭脳、商工農業は口、胃袋、公の財政は血液、市民はこの精巧な機械を動かす個々の体組織である。⁽⁷⁾一般意志、共同我、精神的人格なども、この視点に基づいている。ここからルソーの社会思想の全傾向が生じる。社会が一切の人体と同じものである限り、それがより健全に発展するためには、強い意志と統一が要求され、人間がもつ自己保存の本能 (conservation de soi) もそこに働く。従って体の一部である個々の市民にとって、その個人的自由は事実上存在しないことになる。「国家や都市がその生命が

各組織の統一にある精神的人格であり。もつとも重要な配慮が自己保存であるなら、もつとも順当な方法で各部分を動かし、支配する普遍的で強制的な力が必要である。自然が各人に全組織を支配する絶対的な力を与えたように、社会契約は政治体に全部分を支配する絶対的な力を与える。⁽⁸⁾「ルソーの集団主義的（あるいは全体主義的）、保守的性格といわれるものは、このような人間のイマージュによっているのである。

この人間のイマージュは社会論に限らず、すべての重要な概念にみられる。神は、たとえそれが人間の姿をした偶像的なものではないにせよ、サヴォア副司祭が認識し、その実在を実感したのは「世界を動かしている手」⁽⁹⁾であつたし、また自由は「滋養の多い食物だが、消化が強く、それにたえるだけの強い胃袋をもたねばならない」⁽¹⁰⁾のようなものである。このような人間的イマージュは、ルソーの数多くのメタフォールの中でも最も多い。これはルソーの関心が常に人間にあり、常にユマニスト的立場を堅持していたことに合致する。「自然」という概念においても、それはドイッロマン主義者にみられるような宇宙的なものではなく、たえず人間の中に求められた自然であつた。そしてその自然は、人間の近寄り難い深淵、不可知で神秘的なものではなく、たえず発展し、完成される可能性をもつというオプチミストな自然であつた。⁽¹¹⁾ここにルソーの想像力Ⅱイマージュの特性がある。つまり人間的、ユマニスト的、オプチミストなイマージュなのだ。ルソーのあらゆる思想は、このようなイマージュより出発しているのである。

(1) Emile I. 39

(2) B. Groethuyzen, J.-J. Rousseau, Gallimard, p. 117

- (3) Inég. 63—4
- (4) Cnf. I 195
- (5) Contrat. 224, note
- (6) Rousseau artiste. 48
- (7) Economie. 413—4
- (8) Contrat. 253
- (9) Emile II 29
- (10) Pologne, 358
- (11) Cf. H. Lefebvre: Vers un romanisme révolutionnaire, La N. R. F. oct. 1957

ルソーの想像力に関する理論は、今日からみればむしろ素朴で不完全なものである。が古典主義的なものが依然として残っていた十八世紀中葉という歴史的な状況から考えるとやはり斬新で大胆なものだったといふべきであろう。ルソーの獨創性やその大きさは、この想像的なものに対する認識と、その実践にあるといえる。そして、それを可能ならしめたものは、十八世紀中葉のブルジョワジーの急速な発展、社会構造の変動、そこから生じる現実的なものと想像的なものの背理、矛盾であつたとみることができよう。このことはルソーや十八世紀のフランスが、パスカルの意味での誤謬や不合理に満ちていたということではない。今日サルトルが明示しているように、イマージュは現存するいかなるものよりも現実的なのである。(1)市民社会や自然状態、あるいは「新エロイズ」の人物たちの住まうアルプスの麓は想像力によるタブローであり、現実には存在し得ぬユートピアである。だが現存の秩序に対するもつとも強力な武器が、まさにこのようなユートピアであつたことを想起すべきであり、このような点から、ルソーの自然を「象徴的構成概念」と呼んだカッシーラーの見方は正当であるといわねばならぬ。(2)フラン

ス革命が、デイドロの唯物論より、それに導かれたルソーの観念論により強く鼓吹された(3)というのもこのためである。ルソーはこうしたイマジネールなものの威力をよく理解していたのである。

ルソーの描くイマージュは、常に人間中心的なユミニスト、オプチミストのイマージュであつた。これはルソーの思想の方向を決定し、また文学史的には、ドイツその他のロマン主義と異つたフランスロマン主義の性格を決定づけている。言語はしばしば理性の源と同一視され、プラトンの意味でのイデーの形式と考えられて来た。ルソーにあっては、現存することのうな言語は自然の改悪とみなされ、原始言語、情念語を論ずることによつて、ことばのもつ

本来のエネルギーを回復しようとする。言語は人間の外にあるのではなく内部に、つまり人間の直接経験の産物と考えられているのである。この考え方からことばに多くのイマージュを導入することにより、ルソーはフランス語、文体の歴史にある革命をもたらし(4)。

ルソーの提起した想像力の問題は、それがいかに不完全なものであつたとはいえ、今日の美学や心理学、意味論のおお解決しえない問題を含んでおり、われわれは依然としてルソーの問題の渦中にあるのである。

- (1) J.-P. Sartre: L'imaginaire, Gallimard, P. 238
- (2) E. Cassirer: Essay on man (邦訳「人間」岩波 P. 86-7)
- (3) H. Lefebvre: La Somme et le Reste (邦訳「哲学者の危機」現代思潮社 P. 118 参照)
- (4) cf. Ch. Bonaux: Petite histoire de la langue française, A. Colin, P. 262